# 会報

**No.83** (2006年2月)

# 目 次

◆ 日本分子生物学会 臨時 (第14期第2回) 評議員会報告 1	
◆ 日本分子生物学会 第14期第3回評議員会報告 … 2	
◆ 日本分子生物学会 第 28 回総会報告 4	
◆ 日本分子生物学会 2006 年度会計収支予算 5	
◆ 第 29 回日本分子生物学会年会のご案内 ····· 6	
◆ 日本分子生物学会 2006 フォーラム	
『分子生物学の未来 ~コンファレンス&サイエンティフィック・エキジビション~』7	
◆ 学術賞、研究助成の本学会推薦について ·····9	
◆ 研究助成一覧 10	
◆ 林女性自然科学者研究助成基金 助成公募(平成18年度) … 12	
◆ 2007 年 (第 23 回) 日本国際賞授賞対象分野決定のお知らせ ····· 12	
◆ 男女共同参画委員会活動報告 … 13	
◆ 各種学術集会、シンポジウム、講習会等のお知らせ ····· 17	
<ul><li>○千里ライフサイエンスセミナー「クロマチン・ダイナミックスと高次生命現象」… 17</li><li>○ナノ学会第4回大会 … 18</li><li>○第9回マリンバイオテクノロジー学会大会(マリンバイオ東京 2006) … 18</li></ul>	
<b>◆</b> その他 19	
○雑誌「遺伝」の出版社の変更 19	

# 日本分子生物学会

(THE MOLECULAR BIOLOGY SOCIETY OF JAPAN)

URL: http://www.soc.nii.ac.jp/mbsj/

入退会、住所変更等については、会員係までご連絡下さるようお願いいたします。

〒 113-0034 東京都文京区湯島 2-31-14 1st ジェネシスビル 5F

(株) メディ・イシュ内 日本分子生物学会事務局

TEL: 03-5805-1901 FAX: 03-5805-1092

E-mail: bunshi@medissue.co.jp

# 【日本分子生物学会入会申込先】

http://wwwsoc.nii.ac.jp/mbsj/membership1.html

# ◆ 日本分子生物学会 臨時 (第14期第2回) 評議員会報告

日 時:2005年10月15日出 14:00~16:10

場所:ホテル八重洲龍名館「桜|

出席者: 花岡文雄(会長)、阿形清和、大隅典子、岡野栄之、影山龍一郎、勝木元也、後藤由季子、小原雄治、島本 功、田賀哲也、田矢洋一、辻本賀英、中山敬一、鍋島陽一、柳田充弘、山本 雅、山本雅之、永田恭介(庶務幹事)、菅澤 薫(会計幹事)、上村 匡(編集幹事)、桂 勲(広報幹事)、本間道夫(集会幹事)、山梨裕司(集会幹事)、

オブザーバー・山本正幸(前会長)

以上 24 名

欠席者:秋山 徹、石川冬木、押村光雄、郷 通子、竹市雅俊、田中啓二、谷口維紹、本庶 佑、

水野 猛、宫園浩平、山村研一

以上 11 名

記録者:福田 博、徳山久美子(事務局)

臨時評議員会成立について:

永田庶務幹事より、評議員17名、幹事6名、前会長1名が出席し、委任状9名を受理しており、 本評議員会は細則第4章第12条により成立する旨、報告された。

協議および報告事項:

1. 雑誌「Genes to Cells」編集長の交代について

花岡会長ならびに山本前会長より、Genes to Cells の創刊から現在までの経過報告がなされた。2006年1月以降は、Genes to Cells 誌の所有権についても、本学会と Blackwell 社が半分ずつ所有することで、協定書が本年3月にかわされている。Genes to Cells 誌は1996年1月に創刊されて以来、富澤純一氏を編集長として刊行されてきたが、来年、刊行10年目を迎えるにあたり、富澤氏より編集委員長交代の要望が出されている旨、花岡会長より詳細説明がなされた。

引き続き、会則・細則上は、編集長選出に関する規則のないことが確認された後、新編集長選出 にあたり種々の意見交換がなされた。

新編集長(編集部)選出に際しては、web オンライン環境、編集事務所(スペース)、編集実務 に関わる人的な要件もあり、審議の結果、柳田充弘氏に2006年1月からの次期編集長をお願いすることとなった。任期は一応3年とし、学会としてファイナンスのサポートをしていくことの確認 がなされた。将来的な(次々期以降)編集長の任期、編集体制などの懸案事項についても、新編集 長を中心に検討してもらうこととなった。

2. 日本分子生物学会三菱化学奨励賞について

辻本賞推薦委員長より、平成17年度三菱化学奨励賞候補として7件の応募があり、選考の結果、 以下の受賞者3名が決定した。

●高岡晃教 (東京大学大学院医学系研究科免疫学講座 講師)

(和文) 生体防御系におけるインターフェロンシグナル

(英文) Interferon signalling for host defense

●水島 昇()財東京都医学研究機構東京都臨床医学総合研究所 プロジェクトリーダー)

(和文) 哺乳類オートファジーの分子機構と生理的意義の解析

(英文) Studies on the molecular mechanism and physiological role of mammalian autophagy

●村松正道(京都大学大学院医学研究科 COE 助教授)

(和文) 免疫グロブリンクラス組換えを司る遺伝子 AID の発見とその機能解析

(英文) Isolation and its functional analysis of AID that regulates immunoglobulin class switch recombination

引き続き、奨励賞選考に際して、基準/規則(年齢制限など)の変更案が辻本委員長より配布され、資料に基づき検討された。追加意見がある場合には、花岡会長または辻本委員長に申し出ることとし、次回12月の定例評議員会にて、選考規則を決定することとなった。

3. 第31回(2008年)年会について

花岡会長より、資料 (①過去の年会開催リスト②開催地選定のための神戸・横浜比較データ③第31回年会準備スケジュール案)が配布された。会場確保のためにも、次回12月の定例評議員会では2008年年会長を選出しなければならないことが、報告された。本件に際しご意見がある評議員は、花岡会長まで連絡することとなった。

4. 2006 年冬季シンポジウムについて

本間集会幹事より、標記シンポジウム開催企画案についての詳細説明がなされた。企画内容プログラム案に基づき、名称もシンポジウムではなく、"日本分子生物学会 2006 フォーラム「分子生物学の未来」"となることが、了承された。本間集会幹事より、同フォーラムにおいては学会員以外についての発表も可能にしたいとの要望が出され、承認された。

5. その他

大隅男女共同参画委員長より、平成 17 年 10 月より、本学会が、男女共同参画学協会連絡会の幹事学会となったことが報告された。また、学会として「ライフサイエンスの分野における男女共同参画の推進に関する提言」をまとめたので、各評議員においては、各研究機関の関係部署等にぜひ手渡しして欲しいとの依頼があった。

# ◆日本分子生物学会 第 14 期第 3 回評議員会報告

日 時:2005年12月6日(火) 15:30~18:30

場 所:シーホークホテル&リゾート「ボードルーム」(3階)

出席者: 花岡文雄(会長)、阿形清和、石川冬木、後藤由季子、島本 功、田賀哲也、竹市雅俊、田矢洋一、 辻本賀英、中山敬一、鍋島陽一、本庶 佑、柳田充弘、山本 雅(2007年会長兼)、

永田恭介(庶務幹事)、菅澤 薫(会計幹事)、上村 匡(編集幹事)、桂 勲(広報幹事)、

本間道夫 (集会幹事)、山梨裕司 (集会幹事)、町田泰則 (2006 フォーラム代表)、

佐方功幸(2005年会長)、藤木幸夫(2005副年会長)、磯野克己(2005年会特別委員)、

中西重忠(2006年会長)、富澤純一(Genes to Cells編集長)、山本すみ子(Genes to Cells編集室)

以上27名

欠席者:秋山 徹、大隅典子、岡野栄之、押村光雄、影山龍一郎、勝木元也、郷 通子、小原雄治、 田中啓二、谷口維紹、水野 猛、宮園浩平、山村研一、山本雅之

以上 14 名

記録者:福田 博、山口 恵子(事務局)

本評議員会成立について:

永田庶務幹事より、評議員 14 名、幹事 6 名、報告議題関係者等 7 名が出席し、委任状 14 名を受理しており、本評議員会は細則第 4 章第 12 条により成立する旨、報告された。

### 議事:

- 1. 報告事項
  - 1) 辻本賞推薦委員長より各種学術賞の推薦状況について、また石川研究助成選考委員長より各種研究助成候補の推薦状況や結果等について、それぞれ報告された。
  - 2) 菅澤会計幹事より 2005 年度会計収支中間報告がなされた。
  - 3) 佐方第28回年会長より、演題投稿数が初めて4000題を超えたことなど、資料に基づき準備状況の報告がなされた。

引き続き磯野年会特別委員より、第28回年会 Web 投稿結果(投稿状況の時間経過、カテゴリー別投稿数等)の説明がなされた。

- 4) 中西第29回年会長より、第29回年会(第20回国際生化学・分子生物学会議)について、若い研究者がより高い関心を抱き参加できるよう準備を進めていることが報告された。同国際会議会長を兼任する本庶評議員からも、数々の新しい試みに取り組んでいるとの補足説明がなされた。引き続き永田庶務幹事(IUBMB組織委員会オブザーバー兼)より、評議員・幹事各位にはIUBMB2006「登録推進委員」(本学会会員に対してIUBMBへの参加を推奨いただく)に就任頂きたいこと、さらに各評議員・幹事より登録推進委員2名を推薦してほしいとの組織委員会からの要望の説明がなされ、承認された。第29回年会の演題締切の期日(2006年1月31日)が迫っており、その旨のお知らせを会員あてにメール配信にて通知することとなった。
- 5) 山本第30回年会長より、第30回年会は2007年12月12日(水)~15日(土)の期間、パシフィコ横浜で開催される予定であり、若い研究者の発表機会を増やすという点で第29回年会を引き継ぐ形にしたいとの報告があった。
- 6) 町田 2006 フォーラム代表より、2006 年 12 月 6 日 水 ~ 8 日 金 の 期間、名古屋国際会議場で 開催される 同フォーラム について 報告があった。
- 7) 上村編集幹事より Genes to Cells の購読状況についての説明があった。また富澤純一編集長より刊行状況、審査状況等について詳細説明がなされた。日本人研究者から質の高い投稿が多く寄せられているとの報告がなされ、また長年協力頂いた編集委員への謝辞が述べられた。引き続き、柳田新編集長より新編集部の準備状況につき説明が行われた。
- 8) 花岡会長(大隅男女共同参画委員長代)より、男女共同参画委員会の活動状況ならびに、同委員会のまとめた「ライフサイエンスの分野における男女共同参画の推進に関する提言」(大学・研究機関等に対しての要望)の改訂版における主な変更点の説明がなされ、同委員会委員を兼任する後藤評議員からも補足説明があった。また本年10月より本学会が「男女共同参画学協会連絡会」(加盟学会27、オブザーバー学協会20)の幹事学会を引き受けており、大隅評議員が同連絡会委員長、大坪久子会員が同副委員長に選出されている旨説明がなされた。
- 9) 第20期日本学術会議会員を兼任している本会評議員のうち出席者であった4氏から、同会議の動向について報告がなされた。

### 2. 協議事項

- 1) 菅澤会計幹事より2006年度事業計画および予算案が諮られ承認された。
- 2) 日本分子生物学会三菱化学奨励賞選考に際しての基準/規則に関する資料(再)が配布され、辻本賞推薦委員長より説明がなされた。討議の結果、再検討することとした。
- 3) 第31回 (2008年) 年会については、年会長を大阪大学長田重一教授に依頼することが諮られ、 承認された。

引き続き、山本第30回年会長より、第30回および第31回年会の開催形態につき、他日本生化学会との合同開催の提案(可能性の有無を含め)がなされ、種々の意見交換が行われた。本評議員会においては、「年会運営は年会長の責任のもとに企画開催される」といった従来の原則確認にとどまり、引き続き検討を重ねることとなった。

- 4) 2007 年春季シンポジウムについて、世話人を徳島大学塩見春彦教授に依頼することが諮られ、 承認された。
- 5) 花岡会長より、学会の法人化を含め、本会が直面するいくつかの案件の説明があり、討議の結果前向きに検討することとなった。会長の諮問機関として「将来計画検討委員会」を発足し、同委員会にて今後検討することとなった。委員会構成についても提案が行われ、承認された。

[将来計画検討委員会:阿形評議員、岡野評議員、後藤評議員、山本(雅之)評議員、 磯野年会特別委員、上村編集幹事、永田庶務幹事]

### 3. その他

2006年1月より Genes to Cells 編集長が富澤編集長から柳田充弘編集長へ代わることに際し、本 評議員会にて両編集長の引継ぎ挨拶が行われた。創刊より長年に亘り尽力を賜った富澤編集長へ、本会を代表し、花岡会長より記念品が贈られた。同様に花岡会長より、編集業務に長年ご尽力頂いた山本すみ子氏へ感謝状が手渡された。

### ◆日本分子生物学会 第 28 回総会報告

日 時:2005年12月8日(木) 11:30~12:10

場 所: Zepp Fukuoka (M 会場)

### 議事内容:

1. 開会の挨拶の後、総会議長として中山敬一氏を選出した。

- 2. 議長より、1001 通の委任状を含めて総会の成立していることが発表された。
- 3. 花岡会長より、男女共同参画委員会の活動状況、ならびに本年10月より本学会が「男女共同参画学協会連絡会」の幹事学会となった旨報告された。今期、同委員会において「ライフサイエンスの分野における男女共同参画の推進に関する提言」をまとめ、内閣府・文部科学省等に提出した。さらに初版と同様の趣旨からなる提言を日本生物物理学会との共同提案として学術会議に提出している。

また、今後取り組むべき懸案事項(学会の法人化等)に対処するため、2005年12月6日の評議 員会において将来計画検討委員会を発足した旨報告された。

- 4. 上村編集幹事より、2006年1月より Genes to Cells の編集長が富澤純一編集長から柳田充弘編集 長へと交代する旨報告された。会員諸氏への、より多くの投稿依頼がなされた。
- 5. 永田庶務幹事より会員現況についての報告がなされた。〔2005 年 12 月 8 日現在、正会員 9882 名、 学生会員 6278 名、海外会員 280 名、名誉会員 3 名、賛助会員 42 団体〕

また、桂広報幹事と協力して、より見やすい学会ホームページを構築していきたいとの説明がなされた。

- 6. 辻本賞推薦委員長より、平成17年度三菱化学奨励賞受賞者として3名が決定したことの報告がなされた。
- 7. 名古屋にて 2006 年 12 月 6 日(水)~8 日(金)に開催予定である日本分子生物学会 2006 フォーラム「分子生物学の未来」の準備状況について、町田組織委員代表より報告された。
- 8. 菅澤会計幹事より 2004 年度会計収支決算書が提出・説明され、異議なく承認された。
- 9. 菅澤会計幹事より2006年度事業計画および収支予算案が提案・説明され、異議なく了承された。
- 10. 佐方年会長の挨拶があり、年会は順調に運営されているとの説明があった。
- 11. 永田庶務幹事(中西第29回年会長代)より、第29回年会(第20回国際生化学・分子生物学会議)の準備状況について、報告がなされた。
- 12. 山本第 30 回年会長から、第 30 回年会は 2007 年 12 月 12 日(水)~ 15 日(土)の日程で、パシフィコ横浜にて開催予定であることが報告された。
- 13. 議長より閉会の挨拶があり、総会が終了した。

# ◆日本分子生物学会 2006 年度会計収支予算

# 2006 年度日本分子生物学会収支予算

(2006年4月1日 ~ 2007年3月31日)

収入の部 単位:円

	科	目		2005 年度予算額	2006 年度予算額	備	考	
学	4	会	費	56,450,000	55,330,000	正会員会費:	(9,800名×4,50	39,690,000 円 0 円 × 0.9)
賛	助	会	費	1,470,000	1,350,000	学生会員会費:	(6,100名×3,00	14,640,000 円 0 円 × 0.8)
広	告	収	入	0	1,800,000	海外会員会費:		700,000 円
預	金	利	子	20,000	10,000	入会金:		300,000 円
国際誌購読謝礼金 1,900,000			1,900,000	1,700,000	ブラックウェル社より			
寄	付 :	金 収	入	1,300,000	1,300,000	三菱化学より、奨励賞	副賞および選考経費	貴として
雑	J	収	入	50,000	50,000			
収	入	小	計	61,190,000	61,540,000			
育	1 年 月	度 繰 起	金金	<b>※</b> 40,400,000	44,360,000	※ 2004 年度決算・繰越金概算とした		
合			計	101,590,000	105,900,000			

# 支出の部

科 目	2005 年度予算額	2006 年度予算額	備考
事 業 費	27,450,000	32,150,000	
会報発行	3,200,000	3,300,000	
年会補助金	5,000,000	5,000,000	第 29 回年会(20thIUBMB)補助(前払送金済)
春季シンポジウム補助金	7,000,000	7,000,000	2006 フォーラム(名古屋)
国際誌発行支援金	6,300,000	10,000,000	編集経費 300 万円、人件費等 700 万円
〃 オンラインアクセス費用	4,400,000	4,400,000	ブラックウェル社支払い(フリーアクセス料100万円含む)
国際誌購読関係費	750,000	750,000	国内購読取りまとめ費用等
ホームページ関係費	300,000	700,000	更新費用
事業費予備費	500,000	1,000,000	
評議委員会費	1,000,000	7,700,000	
委員会費	1,000,000	1,200,000	旅費等
選挙・名簿作成費	0	6,500,000	会員名簿印刷代他
業務委託費	12,000,000	12,000,000	
通 信 費	11,940,000	12,900,000	会報・年会プログラム・会員名簿他送料
一般事務費	1,540,000	1,650,000	
印刷費	350,000	350,000	
庶務事務費	740,000	500,000	庶務幹事扱い
雑 費	450,000	800,000	
三菱化学奨励賞関係費	1,300,000	1,300,000	奨励賞副賞および選考経費として
予 備 費	2,000,000	2,000,000	名簿調査関係費用
支 出 小 計	57,230,000	69,700,000	
次年度繰越金	44,360,000	36,200,000	
合 計	101,590,000	105,900,000	

<sup>※</sup>上記の収支繰越金以外に、将来事業準備金 4,000,000 円 (定期預金) があります。

# ◆第29回日本分子生物学会年会のご案内

第 29 回日本分子生物学会年会長 第 20 回国際生化学・分子生物学会議プログラム委員長

中西 重忠

次回第29回日本分子生物学会年会は、第79回日本生化学会大会と合同で、第20回国際生化学・分子生物学会議として、本年6月18日(日)から23日(金まで開催されます。従いまして、次回は、例年通り12月ではなく、6月開催となります。

プログラムは、"Life: Molecular Integration & Biological Diversity" (生命:分子の統合と生物多様性)を基本コンセプトとして、11 のプレナリーレクチャーや約 90 のシンポジウム、約 6,000 題のポスターセッションなどでプログラムが構成される予定です。一般演題は全てポスターセッションとなっております。本会はポスターセッションを重視しており、2 つの大きな会場にテーマ別にポスターを掲示し、十分な討論を行えるよう配慮しております。

また、国際会議ではありますが、従来に比べて参加費を極力抑えて若手研究者の皆様にも参加しやすいよう配慮しております。

日本分子生物学会会員の皆様に多数ご参加いただくことで、本会議が充実したものとなることを心から期待しております。よろしくお願いいたします。

### ■日時・場所

2006年6月18日(日)~23日(金) 国立京都国際会館・京都宝ヶ池プリンスホテル

### ■プログラム

- ・プレナリーレクチャー(11題)
- ・シンポジウム (89 セッション)
- ・ポスターセッション(約6.000 題)
- ※以上の学術プログラム以外に、バイオインダストリーセミナー、イブニングワークショップ、企業説明会、機器展示等を開催予定

### ■演題募集 (一般演題は全てポスターセッションとなっております。)

Late Breaking Abstracts の受付を 4 月に開始予定です。詳細は、<u>http://www.congre.co.jp/iubmb/</u>にて随時案内しております。

※オンライン登録のみ(http://www.congre.co.jp/iubmb/)

注) 演題の提出には、必ず登録および登録費の払い込みが必要です。

### ■事前登録

現在受付中、2006年5月18日締切

※オンライン登録のみ(<u>http://www.congre.co.jp/iubmb/</u>)(5月19日以降は当日登録)

### ■登録費

	~ 2006年5月18日	2006年5月19日~
研究者 (営利組織所属)	35,000 円	40,000 円
学生 (要学生証)	6,000 円	7,000 円
同伴者	5,000 円	6,000 円
バンケット	8,000 円	8,000 円

### ■お問合せ先

第20回国際生化学·分子生物学会議事務局

〒 541-0047 大阪市中央区淡路町 3-6-13 株式会社コングレ内

TEL: 06-6229-2550 FAX: 06-6229-2556

E-mail: <u>iubmb@congre.co.jp</u> http://www.congre.co.jp/iubmb/

# ◆日本分子生物学会 2006 フォーラム

『分子生物学の未来

~コンファレンス&サイエンティフィック・エキジビション~』

日本分子生物学会 2006 フォーラムを下記の要領で開催いたします。

会 期:2006年12月6日(水)~8日(金)

会 場:名古屋国際会議場

目 的:若手研究者に発表の場を与え、基礎生物学の未来と応用を語り合う場とする。

**内 容**:現在下記の要領での開催を検討しております。詳細は次回会報 (No. 84) でお知らせする とともに、2006 フォーラムのホームページ (http://www.aeplan.co.jp/mbsj2006forum/) にも公開します。

- 1) プログラム案
  - ●プレナリーレクチャー
    - 1. microRNAs: tiny regulators with great potential (仮) 講師: Prof. Victor R. Ambros (Dartmouth Medical School, NH, USA)
    - 2. トヨタでの分子生物学への取り組み(仮) 講師:上田建仁氏(トヨタ自動車 東富士研究所 常務役員)
  - ●シンポジウム

組織委員会・プログラム委員会を中心に、約40テーマ企画し、国内外の著名な研究者による口頭発表を行います。

●一般演題

若手研究者を中心に一般演題を募集し、ポスターと口頭での発表をしていただく予定です。 演題投稿はオンラインにて受け付けます。応募要領詳細は次回会報(No.84)に掲載します。

オンライン演題投稿受付期間:2006年8月16日(水)~8月25日(金)予定

### ●バイオテクノロジーセミナー

企業によるランチョンセミナーを行います。

- 2) 講演要旨集は印刷物として発行します。Web上での内容の公開はしませんが、on-lineでキーワードによる内容の検索を行い、検索結果に一致した演題番号を知ることができるようにする予定です。
- 3) 懇親会は行わず、代わりにミキサーを企画しています。
- 4) 会場に保育室を設置することを検討しています。

なお、その他フォーラム開催についてのご意見・ご希望は、事務局へご連絡下さい。

### 2006 フォーラムに関するお問合せ

日本分子生物学会 2006 フォーラム事務局

〒 532-0003 大阪市淀川区宮原 4-4-63 新大阪千代田ビル別館 9 階

Tel: 06-6350-7247 Fax: 06-6350-7248 E-mail: mbsj2006forum@aeplan.co.jp

年会 HP: http://www.aeplan.co.jp/mbsj2006forum/

### 日本分子生物学会 2006 フォーラム 組織委員

代 表 町田 泰則 (名古屋大学大学院理学研究科)

副 代 表 貝淵 弘三 (名古屋大学大学院医学研究科)

事務局長 本間 道夫 (名古屋大学大学院理学研究科)

プログラム委員長 森 郁恵 (名古屋大学大学院理学研究科)

運 営 幹 事 黒岩 厚 (名古屋大学大学院理学研究科)

近藤 滋 (名古屋大学大学院理学研究科)

高橋 雅英 (名古屋大学大学院医学研究科)

松岡 信 (名古屋大学生物機能開発利用研究センター)

松本 邦弘 (名古屋大学大学院理学研究科)

水野 猛 (名古屋大学大学院生命農学研究科)

特 別 委 員 磯野 克己 ((独) 製品評価技術基盤機構)

※プログラム委員は今後メンバーが追加される予定。

### ◆学術賞、研究助成の本学会推薦について

本学会に推薦依頼あるいは案内のある学術賞、研究助成は、本号に一覧として掲載しております。 そのうち、応募にあたり学会等の推薦が必要なものについての本学会からの推薦は、本学会選考委員 会または賞推薦委員会の審査に従って行います。応募希望の方は、直接助成先に問合せ、申請書類を 各自お取寄せのうえ、ふるってご応募下さい。

本学会への推薦依頼の手続きは次の通りです。

### 1. 提出物

- 1) 本申請に必要な書類(オリジナルおよび募集要項に記載されている部数のコピー)
- 2) 研究助成・選考委員用および学会用控に、上記申請書類のコピー計6部(論文は不要) (賞推薦の場合はコピー計7部をご提出下さい。)
- 3) 申込受付確認のための返信封筒または葉書(返信用の宛名を記入しておいて下さい)

### 2. 提出先

### ※賞推薦についての送付先

日本分子生物学会 賞推薦委員長 辻本賀英

〒 565-0871 吹田市山田丘 2-2 大阪大学大学院医学系研究科 B8 遺伝子学

FAX: (06) 6879-3369

### ※研究助成についての送付先

日本分子生物学会 研究助成 · 選考委員長 石川冬木

〒 606-8502 京都市左京区北白川追分町 理学部 1 号館 2F 245

京都大学大学院生命科学研究科 細胞周期学分野

FAX: (075) 753-4197

### 3. 提出期限

財団等の締切の1ヵ月前まで。提出期限後に受取った場合や、提出書類が不備な場合は、選考の対象にならないことがあります。

# ◆研究助成一覧

名 称	連絡先	件数	締 切	助成内容等	概要
第 37 回 三 菱 財 団自然科学研究 助成	(財三菱財団 ☎ (03) 3214-5754 〒 100-0005 千代田区丸の内 2-5-2	総額3億円、 40件程度	2006年2月3日	1件当り 2,000万円まで	自然科学の基礎となる独 創的、かつ先駆的研究と ともに、すぐれた着想で 新しい領域を開拓する萌 芽ともなる研究(原則と して個人研究)。
新化学発展協会 2006 年度研究奨 励金	他新化学発展協会 ☎ (03) 5297-8820 〒101-0041 千代田区神田須田町1-12	8課題、各課題1件	2006 年* 1月31日	1件 100万円	新化学の発展に資する 若手研究者(39歳以下) の研究に対して、研究奨 励金を交付。 研究課題有り。
山田科学振興財団 2006 年度研究援助	(助山田科学振興財団 ☎ (06) 6758-3745 〒 544-8666 大阪市生野区巽西 1-8-1	10 件程度(2 件)	2006年3月31日	1件当たり 100~500万円、 総額4,000万円	自然科学の基礎的研究に 対しての研究費援助。 【推薦書は山田財団HP よりダウンロード www.yamadazaidan.jp
国際生物学賞	国際生物学賞委員会  (03) 3263-1722  〒 102-8471  千代田区一番町 6  日本学術振興会内	1件(1件)	2006年* 5月24日	賞状、賞牌、 1,000 万円	生物学の研究において世界的に優れた業績を挙げ、世界の学術進歩に大きな貢献をした研究者。
第 24 回 研 究 助 成	(助持田記念医学薬学振興財	総額 4,500 万円	2006 年* 6月 30 日	1件 100万円	生命科学・薬物科学・情報科学と医療応用の研究の分野における研究で、
第23回国内および海外留学補助金	団 (03) 3358-7211 〒 160-8515	総額 1,000 万円	2006 年* 6月 30 日	1件 50万円	顕著な功績があり、かつ 新進気鋭の研究者。
第23回持田記 念学術賞	新宿区四谷 1-7	2 件以内 (1 件)	2006 年* 7 月 31 日	1件 300万円	
平成 19 年度笹川科学研究助成	(助日本科学協会 ☎ (03) 6229-5365 〒 107-0052 港区赤坂 1-2-2 日本財団ビル	約 350 件	募集期間 2006 年* 9月1日 ( 10月13日	1件当り100万円まで	人文科学、社会科学および自然科学(医学を除く)、または境界領域の研究計画に関するもの。 4月1日現在、35歳以下の若手研究者へ助成。
上 原 賞	(財上原記念生命科学財団 ☎ (03) 3985-3500 〒 171-0033 豊島区高田 3-26-3	2件以内(1件)	2006年*9月8日	金牌 2,000 万円	生命科学の栄養学、薬学、 基礎および臨床医学、社 会医学、東洋医学で顕著 な業績を挙げ、引き続き 活躍中の研究者。
第23回井上学 術賞	<ul><li>(助井上科学振興財団</li><li>☎ (03) 3477-2738</li><li>〒 150-0036</li><li>渋谷区南平台町 15-15-601</li></ul>	5件以内 (2件)	2006 年* 9 月 20 日	1件賞状、メダ ル、200万円	自然科学の基礎的研究で 特に顕著な業績を挙げた 者(ただし締切日現在満 50歳未満)。
第 15 回 木 原 記 念財団学術賞	(附木原記念横浜生命科学振 興財団 ☎ (045) 825-3487 〒 244-0813 横浜市戸塚区舞岡町 641-12	1件(1件)	2006年*9月30日	賞状、記念牌、 200 万円	最近において生命科学の 分野で優れた独創的研究 を行っている国内の研究 者で、原則として締切日 現在 50 歳以下の者。

名 称	連絡先	件 数	締 切	助成内容等	概要
東レ科学技術賞	(財東レ科学振興会 ☎ (047) 350-6103 〒 279-8555 浦安市美浜 1-8-1 東レビル	2件前後(2件)	2006年* 10月7日	1件につき 賞状、金メダル、 500万円	学術上の業績顕著な者、 学術上重要な発見をした 者、重要な発明により効果が大きい者、技術上の 重要問題を解決し貢献が 大きい者、現のは発表し
東レ科学技術研 究助成		総額 1億3,000万円 10 件程度 (2 件)	2006 年* 10 月 7 日	特に定めず最大 3,000 万円程度 まで	基礎的な研究に従事し、 今後の研究の成果が科学 技術の進歩・発展には するところが大きいと考 えられる、独創的、萌芽 的な研究を活発に行って いる若手研究者。
第38回科学振 興賞	(財内藤記念科学振興財団 ☎ (03) 3813-3005 〒 113-0033 文京区本郷 3-42-6 NKD ビル 8 階	1件(1件)	2006年*10月2日	金メダル、 500 万円	人類の健康の増進に寄与 し得る自然科学の基礎的 研究、自然科学の進歩発 展に顕著な功績を挙げた 研究者。 同上のテーマに取り組
第38回海外学者招へい助成金		(前期·後期 各1件)	2006 年* 6 月 1 日 10 月 2 日	1件 20~60万円 まで (エリアによ る)	一、に取り組 み、国際的に高い評価を 得ている外国の研究者を 招へいする受入れ責任者 に贈呈。
ブレインサイエ ンス財団研究助 成	(財プレインサイエンス振興 財団	8~10件	2006 年*	1件 80~100万円	ブレインサイエンス研究 分野において独創的で 国際的評価に値する研究 者。
塚原仲晃記念賞		1件	10月27日	1件 100 万円	生命科学の分野において 優れた独創的研究を行っ ている 45 歳以下の研究 者。
海外派遣研究助成	☎ (03) 3273-2565 〒 104-0028 中央区八重洲 2-6-20	若干件	2007 年*	1件 30万円まで	ブレインサイエンスの研究の促進を図るため、国際学会、シンポジウム等への参加、あるいは研究
海外研究者招聘助成		若干件	1月12日	1件 30万円まで	者の派遣を助成。 同分野において独創的 テーマに意欲的に取り組 んでいる外国人研究者の 招聘を助成。
平成19年度研究助成	<ul><li>(財長瀬科学技術振興財団 ☎ (06) 6535-2117</li><li>〒 550-8668</li><li>大阪市西区新町 1-1-17</li></ul>	10 数件	2006 年* 11 月 30 日	1件 250万円以内	生化学および有機化学等 の分野において研究活動 を行う研究者または研究 機関。
2007 年度研究集会助成	(財)ノバルティス科学振興財 団 ☎ (03) 5464-1460 〒 106-0031 港区西麻布 4-16-13 西麻布 28 森ビル 10F	約 10 件 (1 件)	2006 年* 9月30日	1件 50 万円	おいます。 おいまで開催されるとれるとれるとれるとれるとれるといる。 で開学されの領対成り成功成りなど、 で開始を表示を表示を表示を表示を表示を表示を表示を表示を表示を表示を表示を表示を表示を

<sup>( )</sup>内は、応募に当たり学協会等からの推薦が必要な場合、本学会の推薦枠を示しています。 \*は、本年度の案内を受取っておらず、昨年の締切日を参考に示してあります。

### ◆林女性自然科学者研究助成基金 助成公募(平成 18 年度)

下記の助成を行うことになりました。

希望者は申請書を事務局にお送り下さい。

### ●対 象:

わが国の大学、国公立又は非営利事業財団等の研究機関において、自然科学(化学及びそれに関連ある物理学・生物学)の基礎研究に従事する若手女性研究者(国籍を問わない)。

### ●助成内容:

①研究助成:10 数件、総額約2千万円。②林フェロー:博士号を目指す若手研究者(1百万円)数名。2年間助成。③国際研究交流助成(国際研究集会での研究発表、海外での共同研究のための渡航)年10件程度、総額150万円。

### ●申込締切日:

2006 年 3 月 31 日金 ③は事務局に問い合わせのこと

### ●申 請 書:

中央三井信託銀行のホームページからダウンロードしてください。

http://www.chuomitsui.co.jp/koueki/k\_topm.html

### ●申込・問合せ先:

〒 105-8574 東京都港区芝 3-33-1

中央三井信託銀行本店法人営業第二部公益信託課内林基金事務局

TEL: 03-5232-8911 FAX: 03-5232-8919

# ◆ 2007 年 (第 23 回) 日本国際賞授賞対象分野決定のお知らせ

国際科学技術財団は、科学技術の分野において、独創的・飛躍的な成果を挙げ、科学技術の進歩に大きく寄与し、もって人類の平和と繁栄に著しく貢献したと認められる人に与えられる「日本国際賞」を授与している、内閣府、外務省及び文部科学省所管の財団法人です。

「日本国際賞」の授賞対象分野は、科学技術の全分野に渡りますが、別に定める二つの分野領域内で、 「分野検討委員会」が毎年授賞対象分野を選定します。

このたび、2007年(第23回)日本国際賞授賞対象分野が決定いたしましたので、お知らせ申し上げます。

今後とも、国際科学技術財団及び「日本国際賞」にご理解、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

### 領域 I 生産

### 「基礎研究が発信する革新的デバイス|

科学の基礎研究は、現代社会を支える礎として重要な役割を担っています。物理、化学などの基礎研究分野におけるブレークスルーは、時として革新的材料やデバイスとして結実し、それが新産業を生み出すことにつながります。

2007年の本賞は、独創的な基礎研究成果を新産業に結びつくような革新的デバイスの創製にまで発展させた業績を対象とします。

### 領域Ⅱ 生命保全技術·生命環境

### 「共生の科学と技術」

生命体は細胞、個体、生態系として個別に生命現象の諸相を演出するだけでなく、他の生命体と直

接的あるいは間接的に、競争的あるいは協調的な関係性を共有することによって生きています。安定した関係性の破綻は、生物圏のみならず、地球の物理化学的な環境の劣化にすらつながりうるものです。ここでは、単に生物学的な「共生 = symbiosis」という概念に限定せず、細胞、個体、生態系などさまざまな階層で演出される生命体間の共生、すなわち「共に生きる関係」を解析し、そのような共生関係の破綻とその修復に関する科学と技術に貢献した業績を顕彰します。具体的な事例としては、たとえば大気圏、水圏、土壌圏の劣悪化や新再興感染症などの事象が生命体間の共生関係にもたらしている現象や、逆にこれらの事象をもたらすに至った生命体相互の関係の破綻などをも広く包括するものです。

### 本件に関するお問合せ先

財団法人 国際科学技術財団 事務局長 上田昌明

〒 107-0052 東京都港区赤坂二丁目 17 番 22 号 赤坂ツインタワー東館 13 階

電話: 03-5545-0551 FAX: 03-5545-0554

E-mail: info@japanprize.jp URL: http://www.japanprize.jp

### ◆男女共同参画委員会活動報告

### ○第4回男女共同参画企画

2005年12月に福岡で開催された第28回日本分子生物学会年会の会期中、男女共同参画委員会主催で、以下の2つの企画が行われました。

### ワークショップ「企業の女性研究者・技術者をとりまく環境」

日 時: 平成 17 年 12 月 10 日(土) 12:00 ~ 14:00

会 場:国立病院機構 九州医療センター3階 講堂

世 話 人:大住千栄子 (味の素・ライフサイエンス研)、篠村知子 (日立・中研)

これまで本学会の男女共同参画企画は主として大学および公的研究機関の研究者を中心に事例紹介と討論を実施してきたが、理工系の女子学生・女子大学院生の55-60%が企業に就職している実態をふまえ、今年度第28回日本分子生物学会では、題記のワークショップを開催することとなった。日程が学会最終日の午後(2005年12月10日12時~14時)であったにもかかわらず、九州医療センター3階の会場には100人以上の参加者が集まり、約2時間に渡る熱心な事例紹介と討論が行われたので、その概要を報告する。

初めに大坪久子先生(東大・分生研)から、東京大学・農学生命科学科および日本女子大学・理学部の女子学生についての進学率・就職率調査(2005年11月実施、小舘・大坪調査)、および、「学協会アンケートから見る分子生物学会会員の実態(2004年12月11日、赤林・木村)にもとづく紹介があった。女子学生の過半数がいずれは企業に就職している実態や、科学技術系研究者のうち配偶者や子供のいる人の比率を企業と大学・公的研究機関別に比較すると、企業では男性と女性ではさほど大きな差が見られないのに対し、大学・公的研究機関に所属する研究者の場合は明らかに男性より女性の既婚率や子供がいる人の比率が低く平均の子ども人数も少ないという結果が紹介された。

続く4名は、産業界における施策と現状を報告した。渡辺美代子氏(東芝)は「電機業界における男女共同参画の現状と取組み」と題して、初めに広く世界の政治・経済・産業の中枢で活躍する女性達を紹介した。2003年に800年の歴史を誇る英国ケンブリッジ大で初の女性副学長(学長は名誉職で副学長が実質的なトップ)に就任したアリソン・リチャード教授、米国 MIT の第16代学長のスーザン・ハックフィールド教授、フランス MEDEF(経団連に相当)の初の女性 CEO のロランス・パ

リゾ女史、フィリピンの2人目の女性大統領であるマカパガル・アロョ大統領、ドイツ初の女性の連邦首相のアンゲラ・メルケル首相らである。諸外国に比べて日本では女性の組織トップが非常に少ない。さらに渡辺氏は、経済産業省「男女共同参画研究会報告」(2003年)に基づき、女性比率が高い(特に男女勤続年数格差が小さい、女性管理職比率が高いとう特徴をもつ)企業ほど利益率が高いという調査結果と、そのように業績の高い企業を目指すには、(1)単純に女性を増やそうとするのではなく女性が戦力となる施策が必要、(2)性別に関係なく個人を適切に評価し、産後休業や育児休職を過剰にマイナスとしないこと、(3)育児休業の取得や残業時間を減らすなどのワーク・ライフ・バランス施策を社会全体で推進すべきであること、(4)女性の一部もリーダを目指し組織改革を推進することが重要である等を概説した。

続いて世話人の一人の篠村(日立)からは、「日立製作所の男女共同参画推進への取り組み」について、(1)全社的な仕事と家庭の両立と女性の活躍支援策である施策 Gender Free & Family Friendly Plan (F.F. プラン) の紹介、および (2)研究開発部門における実態を紹介した。日立製作所は研究開発投資に力を注ぐことを特徴とする企業文化があるが、もともと工学系に進学する女性比率が低いことから女性研究者・技術者の女性比率は未だに 12%程度である。女性の短時間勤務や育児休職・介護休職などの制度を関連法改正に先駆けて導入してきた制度整備の経過や、育児休職制度の利用実績(現在年間 250~300人の女性と 0~1名の男性が取得)を紹介した。研究開発部門での管理職の女性比率は 4%以下と全従業員に占める女性比率 17%にはるかに及ばないものの、女性研究者・技術者の新規博士号取得者を調べると、1997年以降に女性社員で論文博士や社会人コース博士の新規取得者が顕著に増えてきつつあること、博士号取得者の取得までの勤続年数には男女差がほとんどないことから、女性研究者・技術者の能力開発と人材活用が少しずつ進みつつある現状を報告した。

次に岸本治郎氏(資生堂)から、「企業における女性研究員を取り巻く職場環境の改善への取り組み一資生堂の場合―」と題して資生堂での取り組みを、最後に世話人の一人の大住(味の素)から「食品・バイオ企業の取り組み」と題して味の素での取り組みを紹介した。両社とも顧客の多くは女性であり社員の女性比率が高いという特徴をもつ企業であり、企業の CSR 活動の一環として男女共同参画活動に熱心に取り組んでいる。資生堂では 2002 年にインターネットを使って育児休業中の女性の職場復帰を支援するプログラム「wiwiw(ウィウィ)」を事業として立ち上げた。この事業は育児休業中の社員に wiwiw の掲示板等を通じて育児情報や職場復帰に向けたビジネススキル向上のための講座提供、職場の上司と情報交換できる掲示板等のサービスを提供し、スムーズな職場復帰を支援する。このプログラムは企業各社の人事担当の注目を集め、現在、資生堂以外の 80 社以上の企業が wiwiw を導入している。現在では女性社員を支援する諸制度の拡充から一歩進めて、男女問わず効率的に仕事を行って私生活も充実させるという、働き方の意識改革が重要と考え、ワーク・ライフ・バランスの実現に力をいれ、時間管理のスキル向上プログラムや、研究所に子供たちを招待して両親の働く姿を見てもらう、などの新しい試みも始めている。

味の素でも「あなたは味の素の明日の素です。あなたにしかつくれないものがある。あなたのお客様は、世界中にいる。あなたには、一緒に働く仲間がいる」という味の素グループ人事理念の下、職場と個人が協力し合って生産性向上を目指し、育児をしながら働く者のキャリアプランの推進・支援を行い、社内風土としての職場意識の高揚に焦点を当てるとする目標を掲げている。育児休職や育児短時間勤務制度の整備に加え、より利用しやすいように育児ハンドブックを配布し、キャリアライフプランの作成や出社後のフォローに力を入れている。昨年度は技術系職員の年間50名ほどが育児休職を、30名ほどが育児短時間勤務を取得しており有効に機能している。技術系の女性比率は約16%に対し、技術系基幹職女性比率は4%程度であり、他企業と大きな差は見えないが、勤続年数などに男女差はほとんどなく、また、学位取得者の女性比率が6%と活躍の様子が伺える。

このように、企業における男女共同参画の取り組みは、これまでの諸制度整備が一応の成果をあげ、 現在は運用と改善へのフィードバックが必要な新しい段階に入っているといえる。具体的には、働き 続けることからよりよく働くことを目指し、ロールモデルの提供、メンターといったアドバイザー指導者制度の導入などの取り組みを始めている企業もある。今回の企画は、男女共同参画取り組みについての企業間での情報交流のよい機会にもなった。当日会場に参集した聴衆は大学・公的研究機関に所属する研究者が多く、企業の取り組みに対し認識を新たにしたと評価する声があった。一方で、短時間勤務によって仕事の効率は悪くならないという証明をどのように示すことができるのかという質問や、大学や研究機関でキャリアを積んできた若手研究者や技術者をもっと積極的に企業で採用するような動きを望むという要望が寄せられた。男女共同参画に関連する施策や問題意識について、企業と大学・公的研究機関とのギャップがあり、どのように埋めていくかは今度の課題といえよう。

### シンポジウム「両性がともにキャリアパスの多様性を享受する機会を得るには:

~採用する側と採用される側の希望・現実と今後の取り組み~」

日 時: 平成 17 年 12 月 10 日仕) 14:00 ~ 16:30 会 場: 国立病院機構 九州医療センター 3 階 講堂世 話 人:日本分子生物学会・男女共同参画委員会: 粂 昭苑・田賀 哲也(熊大・発生研)

男女共同参画については色々な視点から考えることが大事ですが、今年の年会では特に男性女性にかかわらずキャリアパスの多様性が有る環境下で研究のチャンスを得ることが発展性につながるのではないかとの視点のもとで、今後の取り組みに必要なことを議論したいというのが趣旨でした。

- ●プログラムと内容は以下のとおり。
- ①学会長挨拶:花岡文雄(大阪大・生命機能)

でのご自身の経歴を紹介してくれました。

②男女が共に働きやすい職場とは何か、働き続けられるためには何が望ましいか: 粂 昭苑 (熊本大・発生研)

今回のシンポジウムのイントロとして、キャリア形成をしていく過程で次のステップに進むため、 配偶者やパートナーとは異なる勤務地に赴任する必要がある時に、どういう選択肢を採るかについ て、いくつかの実例を紹介し、現状と問題提起をしました。

- ③寒翁が馬:若尾りか(理研・免疫アレルギー科学総研セ)
  - いくつかの時限職での自分の経験を基に、時限職の問題点である研究テーマの一貫性を保つ難しさと保育園について問題提起。逆に配偶者はこれまでと関係のないテーマに取り組むことになった結果、突然に大きく展開した例を引き合いに、未来は誰にも予測できません、と締めくくりました。第2子妊娠中のため、音声入りのパワーポイントでの講演ですが、ところどころ会場から笑いを引き起こしました。
- ④私大医学部教官と言う選択:金井正美(杏林大学・医) 女子学生・教員の割合など私大医学部についてたくさんの統計数値を紹介してくれました。私大の 講師職は講義、実習、その準備期間を含めると年間50%が教育に占められるという現状、そして 実験テーマの継続、配偶者との同居などを選択した経緯、大学院からポスドクを経て現在に至るま
- ⑤なぜ私はここまで来れたのだろう?:荒木喜美 (熊本大・発生研)

「女性が認められるようになるには、男の3倍働かなきゃだめ」、といわれた大学生の時でしたが、「今では、もうこのような風潮はないかと思ってはいますが、男性と同等に働くだけでも、12時間労働が当たり前の状況では、家庭生活は崩壊してしまいます」「研究のため何かを犠牲にしなければいけない、という状況は望ましいことではない」、という言葉が印象的です。

⑥男女機会均等の前提:松崎 文雄 (理研・発生・再生研)

CDBにフルタイムで研究を行う大学院生と研究員では、男女比率に大きな差がなく、CDBでは能力ある女性をPIとして積極的に採用する方針であるが、現実には、PIになると女性比率が減少しています。その割合は、PI応募者の女性比率と大差なく、応募者に占める女性の割合の少なさがPIと研究員(大学院生)の男女比率の格差を生じる主因であると思われます。制度上では、結婚、出産、育児(男性も含め)に関する任期制研究者と定年制研究者の格差は制度上ないということです。また、CDBに限らず、今後の課題として:任期制の研究員(ポストドク)のキャリアパスについて、PIとなること以外にはほとんどないのが現状であり、今後、ポストドクを含む任期制研究職のキャリアパスの開拓、博士号をもった研究技術者などの新しい職種をキャリアパスとして確立してゆくことが重要であると指摘してくれました。

⑦適正な競争原理と男女共同参画:「適正な」を実現するための制度面の考察:田賀 哲也(熊本大・ 発生研センター長)

女性 PI 予備層が PI になる機会を得るために実績を積むにあたっても、必要な環境整備が伴っていなければ改善の有効性が低下することが考えられます。PI 予備軍を育てることに関して、熊本大学発生医学研究センターの取り組みを紹介しました。

- ⑧分子生物学会・平成17年の取り組み:大隅 典子(男女共同参画委員会委員長:東北大・医) 昨年までのシンポジウムの議論とメーリングリスト等を通じて会員から広く募集した具体的意見と を踏まえて、分子生物学会で提言の作成、生物物理学会と共同で学術会議に提言を提出したり、男 女共同参画学協会連絡会を通じて要望を政府に伝えるため、文科省や内閣府へ出向き、提言の説明 をしたり、この1年間の活動の経緯を報告してくれました。このように、大変な作業をした今年度 ですが、今後、メディアへ発信し続けたり、評議員の女性比率を上げること、などをしていきたい と締めくくりました。
- ⑨「科学技術分野における男女共同参画~政府の施策」: 塩満 典子(内閣府 男女共同参画局) 分子生物学会を始め、男女共同参画学協会連絡会、生物物理学会等からの提言に基づき、内閣府 男女共同参画局では、18年度からの5年間における新計画の策定のための検討がされてきました。 その結果、女性研究者の育成・活躍促進のための「女性研究者支援モデル育成」、「復帰支援型特別 研究員の創設」など、男女共同参画推進のための環境づくりのための予算案がいくつか盛り込まれ ました経緯と今回盛り込まれた予算についてお話してくれました。また今後少子化の流れを変える ため、従来の取り組みに加えて、育児休暇などをはじめとする雇用環境の整備など、今後対策を練っ ていかなければならないと締めくくりました。

フロアからは、「企業におけるポスドクの採用について」学会として対応を求める声が上がりました。そして、育児は保育園児のみではなく、小学生、中学生を持つ研究者にとっても継続していることを指摘し、学会会期中に、小学生も参加できる企画を学会として主催したらどうか、そしてノンアカデミックに対する提言を今後していったらどうか、などの提案が上がりました。

### 【男女共同参画学協会連絡会の幹事】

加盟学会の持ち回りになっている男女共同参画学協会連絡会の幹事を、2005年秋より1年間、本学会が引き受けることになりました。

(http://annex.jsap.or.jp/renrakukai/index.html)

### 【男女共同参画学協会連絡会】

男女共同参画学協会連絡会の幹事学会として、2006年10月6日金、東京大学構内において、「男女共同参画学協会シンポジウム」を開催します。実行委員長は本学会の大坪久子会員(東大・分生研)、シンポジウムのテーマ、具体的な会場の選定等は今後連絡会内にワーキンググループを作って進めて

ゆく予定です。ワーキンググループを手伝ってみたいと思われる方、分科会をオーガナイズしてみたいと思われる方は「第4期男女共同参画学協会連絡会事務局」まで御連絡下さい。

(E-mail: kvodo-sankaku@medissue.co.jp)

### 【女子高生夏の学校】

昨年、8月に男女共同参画学協会連絡会の主催により国立女性教育会館(埼玉県)にて開催され、大手新聞や NHK など各種メディアに取り上げられ大きな反響を呼んだ「女子高生夏の学校」を、今年も開催します。実行委員長は、電子情報通信学会の荒川薫先生(明治大学)、開催期日は 2006 年 8月 17日 - 19日の間で、二泊三日、もしくは一泊二日で行われる予定です。ボランティアを希望される方は「第 4 期男女共同参画学協会連絡会事務局」まで御連絡下さい。

(E-mail: kyodo-sankaku@medissue.co.jp)

# ◆各種学術集会、シンポジウム、講習会等のお知らせ

○千里ライフサイエンスセミナー

「クロマチン・ダイナミックスと高次生命現象」

日 時:平成18年3月15日(水) 10:00~17:00

場 所:千里ライフサイエンスセンタービル5階ライフホール

着 眼 点:クロマチン研究の進展が著しい。クロマチンをなす DNA と蛋白質の生化学的修飾の詳細 のみならず、それらの修飾状態が、発生、分化、老化、がん化といった生理的・病理的過程にどのような役割を果たすのかが今日の研究の焦点である。その成果は、成人病やがん の治療薬開発に大きく貢献するであろう。

クロマチンと高次生命現象の関連について最先端の研究者よりお話をうかがう。

コーディネーター:京都大学大学院生命科学研究科 教授 石川 冬木

プログラム:

1. ヒストン修飾とクロマチンダイナミクスを結ぶ点と線

京都大学医学研究科 先端領域融合医学研究機構 科学技術振興 教授 木村 宏

2. Nucleosomal Histone Kinase-1 によるヒストン H2A の Thr 119 のリン酸化とその意義

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 教授 伊藤 敬

3. ゲノムインプリンティングの機構と個体発生

国立遺伝学研究所 人類遺伝研究部門 教授 佐々木 裕之

4. 人工染色体ベクターを用いた細胞機能の制御

藤田保健衛生大学総合医科学研究所 講師・プロジェクトリーダー 池野 正史

5. 細胞記憶の維持と破綻

京都大学ウイルス研究所 感染症モデル研究センター 教授 眞貝 洋一

6. DNAメチル化による胚発生エピジェネティクス制御

理化学研究所 発生・再生科学総合研究センター チームリーダー 岡野 正樹

定 員:300名

参加費:会員(大学・官公庁職員、当財団の賛助会員)3,000円

非会員 5,000 円、学生 1,000 円

申し込み要領:①氏名、〒、所在地、勤務先、所属、電話および FAX 番号を明記の上、郵便、FAX 又は E-mail で下記宛お申込み下さい。

②事務局より受付の通知を返送いたしますので、通知書に記載した振込先口座に参加

費をお振込み下さい。

③入金を確認後、通常2週間以内に領収書兼参加証をお届けいたします。

申 込 先:(財子里ライフサイエンス振興財団セミナー(V3)事務局

〒 560-0082 大阪府豊中市新千里東町 1-4-2

千里ライフサイエンスセンタービル 8F

TEL: 06-6873-2001 FAX: 06-6873-2002

E-mail: fujisawa-lsf@senri-lc.co.jp URL: http://www.senri-lc.co.jp

### ○ナノ学会第4回大会

ナノテク最前線-ナノ物質からナノ医療まで-

主 催:ナノ学会(第4回大会実行委員会)

会 期:2006年5月19日金~21日田

会 場:京都大学百周年記念ホール (京都市左京区吉田本町)

### シンポジウム

主 企 画:日本のナノテク事業クラスター

特別企画:『計算機によるナノマテリアルデザイン』

『ナノ医療・ナノバイオの新たな潮流』

『液体研究はナノテクの break through となりうるか』

### 特別講演・招待講演(予定)

堀場雅夫(堀場製作所創業者,前会長)

茅 幸二 (理化学研究所 所長)

赤井久純(大阪大学 大学院理学研究科 教授)

吉田 博(大阪大学 産業科学研究所 教授)

寺嵜 亨(豊田工業大学客員助教授) 他 約15名

### 一般研究発表

ポスターおよび口頭による研究成果発表(約300題予定)

### 分 野

ナノ構造・物性、ナノ機能・応用、ナノバイオ・メディスン等に関わる研究

発表申込み: 3月15日までに申込用紙に必要事項を記載の上,予稿集原稿と併せてご提出ください。

詳細は http://www.scphys.kyoto-u.ac.jp/~nano2006/ をご覧ください。

問い合わせ先:ナノ学会第4回大会事務局 永谷清信

〒 606-8502 京都市左京区北白川追分町 京都大学大学院理学研究科 物理学第一教室内

Tel: 075-753-3774, Fax: 075-753-3780 E-mail: nano2006@scphys.kyoto-u.ac.jp

### ○第9回マリンバイオテクノロジー学会大会(マリンバイオ東京 2006)

主 催:マリンバイオテクノロジー学会 期:平成18年5月27日(土)~28日(日)

会 場:東京海洋大学品川キャンパス (〒108-8477 東京都港区港南4-5-7)

発表申込締切:平成18年3月15日(水)(必着)

予稿原稿締切:平成18年4月20日休(必着)

発表形式:口頭発表(質疑含み15分、OHP、液晶プロジェクター使用)、ポスター発表

大会内容: 1. 一般講演(口頭発表、ポスター発表)、2. シンポジウム、3. 懇親会

一般講演のセッション:以下の9セッションを予定しております。①微生物②微細藻類・海藻・付着生物③魚介類④天然物・未利用資源⑤バイオミネラリゼーション⑥マリンゲノム⑦環境・温度適応⑧健康食品・機能性食品⑨その他

### 参加・発表申込方法:

参加をご希望の場合は申込者氏名・所属及び連絡先(住所、電話番号、メールアドレス)を、発表をご希望の方は申込者氏名・所属及び連絡先、発表希望セッション、希望発表形式、発表者氏名・所属略記(連名の方全員)、演題を明記の上、下記の申込先までお申込下さい(電子メールをご利用下さい)。なお発表者は学会会員に限らせていただきます。詳しくは大会ホームページを御覧下さい。口頭発表演題数が多い場合、事務局の判断によりポスター発表をお願いすることがありますので、ご了承下さい。

参加登録費: (平成 18 年 4 月 20 日休まで)

会員 一般 5,000 円、学生 2,000 円; 非会員 一般 9,000 円、学生 4,000 円 (平成 18 年 4 月 20 日休以降)

会員 一般 7,000 円、学生 4,000 円; 非会員 一般 10,000 円、学生 5,000 円 (すべて講演要旨集代を含みます)

懇 親 会: 平成 18 年 5 月 27 日(土) 18 時~ 20 時(会費 一般 6,000 円、学生 3,000 円 会場: 東京海洋大学品川キャンパス楽水会館)

大会事務局、問合せ先:

〒 108-8477 東京都港区港南 4-5-7 東京海洋大学大学院ゲノム科学講座内第 9 回マリンバイオテクノロジー学会大会実行委員会

TEL: 03-5463-0174、0556、0689 FAX: 03-5463-0690 電子メール: mbt2006@s.kaiyodai.ac.jp 学会ホームページ: http://www.soc.nii.ac.jp/ismb/

大会ホームページ: http://www2.s.kaiyodai.ac.jp/grad/genome/mbt2006/index.html

一般シンポジウムとして、5-6課題を予定しています。

シンポジウムの企画を公募いたします。シンポジウムの企画をご希望の方は大会事務局までご連絡下さい。

### ◆その他

### ○雑誌「遺伝」の出版社の変更

財団法人遺伝学普及会は、1947年以来、「広い分野の研究者、教員、学生および社会人を対象に生物科学の基盤としての遺伝学の知識の普及を図る」という先見的な目的をもって雑誌「遺伝」の刊行事業を続けてきましたが、60巻を節目として出版社が(株)裳華房から(株)エヌ・ティー・エスに代わり再出発することになりました。

再出発する雑誌「遺伝」は、そのサブタイトルにあるように広く生物科学全体を視野に入れています。また、若者の理科離れが喧伝されている昨今、「生物教育」というジャンルへの取り組みにも力を入れています。研究者、教員、学生に留まらず、広く社会に遺伝学の知識の普及を図るという方針

に則り、幅広いライフサイエンスをカバーする雑誌として、魅力あるものにしたいと思います。

尚、雑誌「遺伝」の詳しい情報は以下の web site でご覧になれます。

http://www.nts-book.co.jp/item/detail/summary/bio/20051225\_42.html

分子生物学会会員で雑誌「遺伝」をこれまで愛読してくださった方々、今回から読者になってくださる方々に、新しい「遺伝」へのご理解とご声援を改めてお願いいたします。

) 遺伝学普及会 会長 森脇和郎

# 日本分子生物学会 会報

年3回刊行

第83号 (2006年2月)

発 行:日本分子生物学会

製 作:日本分子生物学会 事務局